

貨幣・信用論研究の課題

小幡道昭

1 『資本論』の貨幣論 — 目的と特徴 —

現行『資本論』を読みはじめてまず興味を引かれるのは、冒頭における商品の価値規定と、それに続く「貨幣の謎」(K.,I, S.63)をめぐる一連の考察ではなかろうか。商品価値の背後に人間労働を据え、価値量を社会的・平均的に必要な労働時間によって規定しておくことは、たしかに『資本論』第1巻の骨格をなす剰余価値論に不可欠な前提であった。しかし、もしかりにそれが「貨幣の謎」に端を発する商品、貨幣そして資本の関連を解明する理論に媒介されていないとすれば、これほど長きにわたり論議的となることはなかったのではないか。事実マルクスを投下労働価値説に固執するだけの、マイナー・リカーディアンとみなす見解は後を絶たない。

『資本論』第1巻では、この一般商品の価値規定をうけて、それが労働力商品にもそのまま適用されることになる。これにより、資本による剰余価値の取得が「商品交換の法則を少しもそこなうことなく」(K., S.209)達成されることが強調される。利潤の基礎は不等価交換にあるのではなく、逆に市場の原理が徹底する結果なのだというのである。この議論は、市場を残しながら利潤の存在を否定しようとするプルドンやリカーディアン・ソーシャリストに対してはたしかに鋭利な批判となっている。だ

がそれだけでは、投下労働量を尺度にとって、資本と労働の分配関係を問題にしたリカードの経済学の枠をでていないという見解に必ずしも充分反駁したことにはならない。

ところが、『資本論』ではリカードの『経済学および課税の原理』と決定的に異なる議論が、同時にその冒頭で展開されている。それこそ、市場とはなにかという基本問題を解明する、商品・貨幣・資本の関係をめぐる一連の展開である。そこに描かれているのは、端的にいえば、＜貨幣が実在する市場＞であったとあってよい。事実マルクスが貨幣の問題に取り組むにいたった一つの契機は、当時の社会主義者たちが構想した労働貨幣論に対する批判に潜んでいた。そこには、貨幣を計算単位とみなし、帳簿上の記号に還元する指向が宿されていたのである。このような貨幣認識を批判するなかで形成された市場像こそ、第1巻の表の顔をなす剰余価値論に奥行きを与えている隠された光源であり、それに気がつかなければ、通俗的な分配問題というあまり興味をひかぬ扁平な表情しか読みとりえないであろう。

こうした意味で、マルクスの貨幣論をめぐる理論は、早くから一部においては強い関心の的とされ、その意義をめぐってさまざまな議論が展開されてきた。とりわけ、搾取論の基礎をなす価値論の研究が、いわゆる「転形問題」の展開も含め定式化が進むなかで、剰余価値という残余分の処理をともない、貨幣の存在を不可欠とするマルクス独自の市場像が、あらためて注目されるようになってきているとあってよい。

では、『資本論』の貨幣論はどのような特徴をもつのか。一言でその本質をいえば、単なる計算単位としての貨幣でもなく、また取引のために考案された便宜的な媒介手段としての貨幣でもなく、それ自身ある価値をもつものとして保有される貨幣を、すなわち貨幣の実在性をその中心

概念に据えたところにある。このことは、商品の観点から貨幣を考察している冒頭の第1章「商品」や第2章「交換過程」のうちに明らかに読みとれる。第1章第2節「価値形態または交換価値」の論理からいえば、商品の価値は他の「商品体」の一定量で表現されるのであり、この関係の発展した形態である貨幣形態においても、貨幣は「商品体」として実在することになる。たしかに貨幣商品はその貨幣形態を他の諸商品の関係から与えられるのであり、その商品体自身ももたらす有用性のために欲せられるわけではない。しかし、商品がある価値量を有して存在するというのと同じ意味で、貨幣なるものもまたある価値量を有するものとしてやはり実在することは揺らぐことはない。

さらに、貨幣の実在性は第2章「交換過程」を中心にやや異なる論理で補強されることになる。マルクスはしばしば引かれるように、『金銀は生まれながらにして貨幣ではないが、貨幣は生まれながらにして金銀である』ということは、金銀の自然諸属性が貨幣の諸機能に適していることを示している」(K.,I, S.104)と述べ、商品価値の属性と金銀の自然諸属性の間の合致を、ここでは均質性と量的な分割・合成の可能性のうちに見いだしている。先の価値形態論が、諸商品の側から一商品が押しだされ、貨幣という形態を他から付与される理論だとすれば、これは金銀がその物的な属性において、自ら価値の現象形態たることを示す理論だみることができよう。いずれにせよ、『資本論』冒頭における商品の分析を読むかぎり、マルクスが貨幣を実在の金銀であると主張していることは疑いようがないように思われる。

ところが、つづく第3章「貨幣または商品流通」はこのような貨幣の実在性を必ずしも全面的に展開するものとはなっていない。その展開には、その非実在性を示唆する奇妙な屈折が見いだされるのである。この

章の冒頭でマルクスは「私は、本書のどこでも、ことを簡単にするため、金を貨幣商品として前提する」(K.,I, S.109)という。「金を貨幣商品として前提する」というのは、金銀といった貴金属一般ではなく、単一の金を、という意味かもしれないが、しかしいちおう貨幣商品としての金の存在を確認しているとみてよいであろう。ところが、第1節「価値の尺度」の展開を通じて強調されるのは、商品世界にその価値表現の材料を与えるというこの機能にとっては、「貨幣は、ただ表象されただけの、または観念的な貨幣として役立つ」(K.,I, S.111)という点であり、また第2節「流通手段」でもけっきょく、この機能のある商品を別の商品と交換するための媒介という側面で捉え、このような「貨幣を絶えず一方の手から別の手に遠ざける過程においては、貨幣の単なる象徴的実存でも十分なのである」(K.,I, S.143)とさえ述べている。

こうした価値尺度における貨幣の観念的性格や流通手段における代理可能な性格の強調は、あるいは第3節「貨幣」において、蓄蔵貨幣、支払手段そして世界貨幣といったかたちで、貨幣が「その金の（または銀の）肉体のまま、それゆえ貨幣商品として、現れなければならない」(K.,I, S.144) 場合がある点を対比的に鮮明化するための伏線なのかもしれない。同じ貨幣論のうちにノミナリストとメタリストの対立を交錯させたことの意義は、あとでふれるように軽々に捨て去るべきものではないが、しかしこうした展開はやはり、貨幣の实在をふまえてみるときにはじめて浮上する、本来主題化さるべき問題をかえって没却せしめるといった犠牲を伴っていた。

2 宇野弘蔵の問題提起 — 意義と限界 —

この点にこそ、かつて宇野弘蔵がマルクスの価値尺度論を厳しく批判した理由があったと考えられる。よく知られるように宇野は、価格という形態で商品の価値を<表示する>ことと、その大きさを実際に<はかる>ことは異なるという点に着目し、重さや長さの場合とは根本的に違う、商品価値に固有なはかられ方に注意を促した。『資本論』の場合、冒頭でいわゆる労働価値説が説かれ、商品の価値の大きさがあらかじめ与えられたものとされているために、あたかも商品は一定の価格で滞ることなく販売されてゆくがごとくに考えられやすい。そのため、商品所有者が個別的に価格を設定し、これに対して貨幣商品たる金が実際に出動を繰り返すうちに、価格の訂正を伴いながら商品の価値の大きさもはかれるという特性が明確になってこないと批判したのである。

このように宇野の価値尺度論の核心は、「貨幣の第1の機能は、商品価値の『貨幣形態』に対して、自ら商品価値を実現するものとしての購買にある」（宇野弘蔵『マルクス経済学原理論の研究』岩波書店 1959年 57頁）という点にあるとあってよい。すなわち、マルクス自身が「流通手段」の節の前半で強調している、貨幣が実在し売りと買いが分離している商品流通における販売の困難、いわゆる「商品の”命がけの飛躍”」（K.I, S.120）を貨幣の機能のうちに組み込んでゆくことを意味しているわけである。実際マルクスも、たとえば「分業は、労働生産物を商品に転化させ、そうすることによって、労働生産物の貨幣への転化を必然にする。同時に、分業は、この全質変化が成功するかどうかを偶然にする」と述べ、この点を強調するのであるが、ただちに「とはいえ、ここでは現象を純粋に考察しなくてはならず、それゆえその正常な進行を前提し

なければならない」(K.,I, S.122) というように、本来主題化すべき問題を括弧に入れてしまうのである。

では、宇野の価値尺度論の背景をなす市場とは実際にはどのような特徴をもつのであろうか。こうした市場においては、売り手は商品を価値に匹敵する価格でできるだけ早く販売しそれを貨幣のすがたに変えておこうとする。そしていったん貨幣を入手すれば、そのあとは必要に応じて商品の購買に踏みきればよい。商品は在庫の形態である期間、市場に滞留するのであり、それがいつでも何でも買える貨幣を保証しているのである。貨幣が実在する市場は同時にまた、販売をまつ商品によって充填されている市場でもある。そこでは同じ種類の商品が、商品在庫のそれぞれ一部を構成するものとして商品所有者に分有され、それらは貨幣所有者によってある期間をかけて個別的に、必ずしも同一ではない価格で買い取られてゆく。商品個体はある期間市場に滞留する過程で、同じ商品種の一員として他の個体がさまざまな価格を実現してゆくのを自己の周囲にみることになる。それらは同じ商品種の価格である点で、いずれも自らの価格となりえた可能性をもっている。個々の商品はこうした価格帯を通じて自らが属する商品種の価値の大きさを推定し、それを基礎に個体差を具えた自己の価格を実現しようとするのである。貨幣による購買の繰り返しによって商品の価値がはじめて尺度されるのだという宇野の主張も、反復によって価格の変動や分散が次第にある水準に収斂するという意味ではなく、貨幣が実在する市場における価値の発現様式を強調したものと理解することもできなくはない。

ところでこうした観点から捉えなおしてみると、宇野によるマルクスの価値尺度論批判にも、なお解明されるべき論点が残されてることに気づく。その一つは、労働価値説を冒頭で前提としたことに対する宇野の

批判に関わる。たしかに宇野のいうように、この前提によって商品がある内在的な価値を与えられており、その価値通りにならすぐに販売がなされるといった通念を育んでいった点は否定できない。しかしそれだからといって、商品がある大きさの価値を有するということまで括弧に入れてしまうべきなのか。

貨幣が実在する市場のすがたは、実は、個々の商品所有者が自己の所有する商品にはある価値の大きさがあると思って行動しているのだと想定してみると理解しやすい。商品が販売に先立って値踏みされ、ある価値評価を下される関係こそが、貨幣が実在する市場の特性を理解する鍵になる。周囲の同種の商品がある価格で売れたとすれば、自分のまだ売れていない商品もほぼそのような価格に匹敵する価値をもっていると考えることは不自然ではない。価値実現というのは、もともと商品種にある価値が存在すると見なすがゆえに成り立つ事態なのである。こうして自分の商品が売れなくてもただちにその価格を引き下げないがゆえに、商品の滞貨が存在するのであり、逆に種としての価値概念を支えることにもなるのである。

このように考えてくると、商品がある大きさの価値を有するということは、労働価値説によって支えられるべきではないとしても、だからといってただちに捨て去られるべきものではないことがわかる。そこには、商品は価値はただ需給関係を通じ価格の変動のうちにその大きさを結果的に尺度されるのだとった通念に根本から反省をせまる面が潜んでいる。労働量による価値の量規定とひとまず区別された商品価値の規定には、なお検討すべき論点が隠されているように思われるのである。

宇野によるマルクス価値尺度論批判に残されたもう一つの論点は、貨幣の実在性と金貨幣との関係にかかわる。すでにみたように、『資本論』

の貨幣論は、その前半では価値尺度の観念的性質や流通手段における代理可能性を示唆したあと、これとの対比において「貨幣」の実在性を強調するかたちをとっていた。宇野の批判は事実上、こうした対比的展開構成を廃し、価値尺度における金貨幣の出動を最初から説くかたちになっていた。しかし、価値の大きさが貨幣による個別的な実現による点を明らかにするために、金貨幣という想定がどこまで必要であったのかに関しては、なお検討の余地が残る。こうした個別的な購買による価値の大ききの測定をもちだすためには、基本的には「だれも、別の人が買わなければ、売ることができない。しかし、だれも、自分自身が売ったからといって、ただちに買う必要はない」(K.,I,S.127)ということがいえればよい。それには、金貨幣流通は十分条件であろうが、必ずしも必要条件ではないのである。貨幣の実在性というのは、基本的には貨幣が一定の価値をもつものとしてある期間保有されることでたるわけである。このような購買力の保持が、金銀やその他特定の物的資産から離れてどこまで可能か、この点が問題となるのである。

その場合、まず貨幣の代理物すなわち証券が授受される可能性自体にとくに問題はないだろう。貨幣の授受はその所有者の変更であって、物理的な貨幣の移動を伴う必要はない。貨幣を第三者に保管させ、その保管証券の授受をもって所有権の移転をはかることもありうる。むろん、この場合、その代理物が真に代理物たりえているかは、その受領に際してつねに確かめられるはずである。それは『資本論』の「流通手段」におけるように、商品の持ち手変換を媒介するだけのものだから単なる象徴でよいということにはならない。代理関係を結果の側から単純な媒介物として捉え、これによって支払手段の考察と切断してしまった点は、マルクス貨幣論の重大な瑕疵といわざるを得ない。

たしかにこの代理関係は、既存の貨幣に直接依拠している点で、販売によって得られるであろう、商品のうちに眠る将来の貨幣を基礎とする固有の信用関係とは基本的に区別される。しかし、代理物は所詮代理物にすぎないのであり、それが求めに応じていつでも貨幣本体となるという何らかの予想が前提となる点では、ある種の信用の萌芽をすでに宿している。この予想が真に確信となるとき、代理物はある意味で、本体以上に本体の純粋なすがたを示すものとなる。握った金は不純な金かもしれないが、代理物は絶対に混じりけのない金そのものを表している。純粋な金は強く握れば握るほど、指の隙間からこぼれ落ちてゆくものなのである。特定の商品体から解脱することのできない貨幣商品は、その理念として代理物をつねに要請する面があるといえよう。

同様のことは支払手段に関してもいえる。商品売買においては、商品の受け渡しと貨幣の受け渡しの時期とがつねに合致する必然性はない。売買は債権債務関係をひろく発生させるのであり、債権を示す証書を生み出すことになる。こうした債権証書は貨幣の代理物に通じる面をもつ。この証書もまた、代理物と同様に、マルクスのいわゆる「支払手段」としての貨幣をその本体とする存在なのである。むろん、債権と所有権は法的に異なる効果をもつが、この本体との関係が確信されれば、その証書は事実上貨幣本体の授受に代わりうる性質を帯びるのである。

いずれにせよ、市場における取引関係は、高額な取引や遠隔地への支払いなどにともない、もともと貨幣授受の技法を発展させ、さまざまな代理物の形態を派生させる面をもつ。このように直接的な貨幣本体の授受だけに還元できない複雑な貨幣現象を生成する点は、貨幣の基礎的な分析の領域においても明確にされるべきなのである。金貨幣流通を前提することは、ただちにこのような貨幣現象の把握と矛盾するものではな

いが、その理論的考察を付随的なものとみなす傾向をはらんでいる点には注意しなければならない。特定の商品体が貨幣形態を帯びるとする商品貨幣説にたつことは、金貨幣流通のみを貨幣の本来のすがただとみなすことを意味するわけではない。むしろそれは固有の貨幣論に対して、逆に商品貨幣が複雑な貨幣現象となって発現する関係に焦点をあてることを要請するのである。

3 貨幣・信用論の展開 — 課題と方法 —

以上のように、宇野によるマルクス貨幣論に対する批判を反省的に捉えかえしてみると、そこに貨幣論を信用論につなぐ内的な紐帯が浮かび上がってくる。すなわち、貨幣の実在性を基礎に価値実現を核として展開された貨幣論における市場像は、同時にまた資本主義経済に特有な信用機構を生成する動力を秘めている。市場に商品が次々に持ち込まれ、商品滞貨を形成しながらそれらが個別的に購買されその価値を繰り返し尺度されてゆくという市場構造は、資本主義経済のもとで、将来の販売を基礎に現在の購買力を追加形成する関係に発展する。たしかに、第1篇「商品と貨幣」に始まり第7篇「資本の蓄積過程」に終わる現行『資本論』第1巻を一つの閉じた体系としてみると、この市場像は投下労働価値説を核とした搾取論の蔭に隠れてしまう。しかし、第1巻から第3巻にいたる『資本論』体系全体を鳥瞰してみると、こうした紐帯をそこに読みとることに困難はない。

事実『資本論』第2巻「資本の流通過程」では、このような市場像は個別産業資本の循環運動のうちに体现されてゆく。マルクスはここで、生産期間とならんで流通期間が存在することを当然と見なし、生産資本と

ともに、流通資本や流通費用が投下されることは前提にして、その分析を進めている。たしかにそこでは、なぜ流通期間がかかるのかという根本問題に十分な理論的な考察が加えられているとはいえ、そのため生産期間との性格の違いも必ずしも明確になっていないという限界はある。しかし、流通期間の存在は、すでに述べたように、商品に独自の価値の大きさがあると考える主体の行動を想定すれば自然にでてくることであり、そこにマルクスにおける労働価値説の隠れた効果を見てとることもできよう。とりわけ一方で生産過程をもその運動のうちに含む個別産業資本のもとでは、そうした行動様式はいつそう強まることになろう。生産過程には、どの資本が担当しても大きな差が生じないという意味で客観性のある生産技術が内在しており、それがその商品種の価値の大きさに裏打ちを与えるからである。そしてそれとの対比でいえば、技術的な基礎を欠く商品の販売期間には対極的に、偶然の変動と分散が不可避なものとなる。そこには、貨幣が実在する市場を基礎にした独自の資本像が事実上示されているとあってよいであろう。

このような生産過程と流通過程の対極性は、個別産業資本の展開する競争関係を理解するための鍵を与える。やや模式化していえば、個別産業資本は生産過程へ一定量の投入を規則的に繰り返し、投入を上まわる産出を取得するが、産出された商品が貨幣となるのに要する期間には不規則な変動・分散が避けられないという関係が存在する。単独の資本の運動の内部にこのような異質な過程が内包されていることが、生産物をめぐる社会的分業とは異なる、産業資本と商業資本の間に資本主義経済に特有な分業関係を発展させることにもなる。こうした分業関係を通じて、端緒の市場構造がどのように変化するかという点は、解明すべき重要な課題となろう。

しかしそのもとでもなお、流通過程の偶然的変動は残るのであり、個別産業資本は流通過程に貨幣的な遊休を緩衝とすることで、販売過程の不規則な変動から生産過程の停止と固定資本の遊休による利潤率の低落を回避する必要がある。ただこの貨幣的な遊休はそれ自身また、利潤率を低落させる要因でもあり、流通期間の変動をふまえて個別資本がそれぞれその必要額を判断するほかない。このため、個々の資本は限られた額の貨幣的な遊休部分に対して、たえず過多や不足を経験することになる。価値実現を核とする貨幣論における市場像は、このような個別資本の流通過程の特性に転化し、いわゆる商業信用の形成につながってゆくのである。

そこでは、貨幣商品とその代理物の関係が、商品資本を基礎とした将来の貨幣とその代理物の関係に展開しているといつてよい。たしかに、商業信用の成立には、このような将来の受信側の貨幣取得の確実性と同時に、与信側における現在の貨幣の余裕が必要となる。この後者の側面は、商業信用にあたかも貨幣の貸借であるかのような性格を付与する。しかし、商業信用の本質をなすのは、前者の将来の貨幣化の確実性にある。事実それが現在の貨幣に近づけば、貨幣商品の代理物としてそのまま第三者にも受け取られるのであり、そのとき与信側の貨幣は文字通り遊休する存在となるのである。

逆に受信側の貨幣への転化が与信側から疑われれば、いくら貨幣的な余裕があろうとも、信用関係自体成立しない。このとき、受信者側はだれに対する債権であれば、与信者が受理するのかに強い関心が生じるであろう。そこには、商品所有者が直接的交換の困難に直面し、相手がどの商品なら交換に応じるかに強い関心を抱くのとよく似た関係が潜んでいる。こうした模索のうちに貨幣商品が絞り込まれるとすれば、ある面で

は同様の論理で、銀行資本の分化を説明することもできなくはない。銀行資本の債務に貨幣の代理物としての性格を与えるのは、現在の貨幣ではなく、債務に見合うだけの確実な債権の保有なのであり、それはけっきょく債権先における販売の成否にかかっている。銀行資本とその債務先を連結してみればわかるように、貨幣の代理物がどこまで代理物として認知されるかは、商品の貨幣への転化の可能性と表裏の関係にある。このようにみえてくると、諸商品のなから貨幣商品が分化するとみる貨幣商品説は、信用関係を内包する市場構造へと発展するのであり、そのもとで貨幣論と信用論との紐帯を探り、貨幣本体とその代理物が織りなす複雑な貨幣現象を解明することが、貨幣・信用論研究の基本課題として浮かび上がってくるのである。

その際、原論体系において貨幣論と信用論とはどのような関係にたつのかという点があらためて問われることになる。たしかに、商品と貨幣との関連を扱う貨幣論の領域と、個別産業資本の競争関係を基礎に展開される信用論の領域とは、体系構成上大きな隔りがある。同じ貨幣現象をあえて二つの領域にわけて考察する方法にはそもそもどのような意義があるのであろうか。こうした理論構成は、商品貨幣としての金貨幣を先行させ、つぎに信用貨幣の生成を説くことで、貨幣が、金貨幣から銀行券へと歴史的に進化する過程を反映・模写したものとはいえない。しかし逆にまた、貨幣論も信用論も同じく純粋な資本主義経済の一側面であることを強調するだけではすまないであろう。それでは、金貨幣を本来の貨幣とし、信用貨幣が資本間取引で部分的に派生した状態を資本主義経済の純粋像とすることで、たとえば不換銀行券の流通といったさまざまな貨幣現象を、もっぱら国家の干渉など、商品経済外的な要因に帰着させることにならざるを得ないのである。

しかし、原論体系において貨幣現象を二つの領域に分けて展開する方法には、さらに独自の方法的意義がある。二つの領域は、同じく貨幣現象を扱いながらも、社会的再生産という契機によって媒介されている。信用論が社会的再生産の一分枝をそれぞれ内包した個別産業資本間の競争関係を展開の基礎としているのに対して、貨幣論では単純な商品所有者と貨幣所有者の売買関係が想定されているだけである。そして貨幣論のうちに展開される抽象的な貨幣規定は、そのまま資本主義経済の表層に現れるものではない。それは資本が社会的再生産と関係するなかで信用論における貨幣現象を通じてはじめて目に見えるものとなる。こうした展開方法は、貨幣と資本を生みだす基本構造を具えた市場と、資本によって編成処理される社会的再生産との間の作用・反作用の分析を通じて、貨幣現象の歴史的な変容を引き起こす原動力に照明をあて、資本主義経済における貨幣の多様性を理論的に捉えることを可能にする。この意味で、『資本論』体系を批判的に検討し、貨幣論と信用論との内的な関連を再発掘する作業は、資本主義経済の歴史的な変容を理論的に考察するための方法を模索することでもあるのである。